



事業団だより

第122号

令和4年4月発行

発行人：社会福祉法人
千葉県社会福祉事業団
理事長 相馬 伸男
<http://www.cfj.or.jp/>



春爛漫



ここから新たな暮らしの場へ移った子供達や利用者さんの多くも、日々落ち着いた生活をしていると聞きます。残る日々、最後まで楽しい思い出に満ちた暮らしを続けられるよう職員一同、新たな気持ちで令和4年度を迎えています。

現在、指定管理事業として残る「障害者支援施設更生園診療室」の2つの事業所についてですが、更生園の利用者様は、それぞれ新たな暮らしの場に向けた見学や体験を重ねながら移行を進め、診療室に通う患者様についても転院先の紹介を進めているところです。

既に、令和3年11月末に「福祉型障害児入所施設養育園」は支援業務を終了し、長きにわたり、「千葉県障害児等療育支援事業（袖ヶ浦市・君津市・富津市の3市との委託により実施）」に取り組んできた「児童サービスセンター」も、その事業内容を他法人に継承したことで、令和4年3月31日に事業所を廃止しました。

さて、令和4年度は千葉県社会福祉事業団にとって、千葉県が令和2年8月に発出した「利用者全員の移行を行った上で令和4年度末までに袖ヶ浦福祉センターは廃止する」との方針にもとづき、全ての事業終了の時を迎える年度となります。

感染症患者数が減少に転じつつありますが、新たな変異株の出現も報告され、油断できない状況の続くなかで令和4年度の事業が始まりました。関係する諸団体の皆様には、感染拡大により制約の多い日々の暮らし、計画の多くが実施出来ない状況が続いたものの、昨年度の運営に多大なご支援をいただき感謝申し上げます。

理事長 相馬 伸男

児童サービスセンター事業の廃止

袖ヶ浦市・君津市・富津市の3市と委託契約を結び実施してきた「千葉県障害児等療育支援事業」は他法人へ事業内容を継承し、児童サービスセンターは令和4年3月31日をもって事業を廃止しました。

遡ると、昭和54年4月に「治療教育室」の名称で外来療育や相談事業を始め、以来、数度の事業所の名称を変えつつ、これまで33年の歴史を重ねてきました。この43年の間にお会いした子供達やご家族はどれ程の数になるでしょうか。

今回の事業終了に際しては、多くのご家族関係者から御礼の言葉が届きました。

療育や相談にあたるスタッフも、43年間に専門職として育てていただきました。

事業終了にあたり、皆様からの長年のご支援に感謝すると共に、これまでお会いした全ての子供達、ご家族、そして関係者の皆様の幸多かれとお祈りいたします。

児童サービスセンターを代表して御礼申し上げます。ありがとうございます。

所長 相馬 伸男



さくら さくら いざ舞い上がり
永遠にさんざめく光を浴びて
さらば友よ またこの場所で会おう
さくら舞い散る道の上で

(森山直太郎「さくら（独唱）」より)



保護者様より



残り一年、これまでに振り返り

佐々木佐和世

平成25年の養育園死亡事件は衝撃でした。調査で明らかになる原因と実態。袖ヶ浦福祉センターはどうなるのか保護者に不安が広がりました。この中で保護者が出来ることは何か、不安なのは厳しい視線を浴びる職員も同じこと。保護者会は職員と一丸となって荒波をくぐる覚悟だと訴えました。

職員が支援に集中出来るよう、負担軽減するにはどうしたら良いか。保護者会の事務はすべて役員で担うことにしました。書類の作成、印刷、郵送、返信ハガキの取りまとめ、保護者会費の徴収、会計管理。遠方の役員も駆けつけてくれました。利用者が快適に過ごせるよう環境整備を中心に奉仕作業をしました。作業や昼食を共にする中で保護者間の交流を深めていきました。壁の塗装では県の職員が度々参加して下さり保護者の不安にも耳を傾けてくれました。

並行して毎月役員、更生園職員、県の職員との合同定例会議を開催。更生園の改革進捗状況や課題を話し合いました。県では強度行動障害者支援者養成研修が始まり、更生園でも支援される立場でというテーマで研修が行われました。県の袖ヶ浦福祉センター検討会議には保護者会代表が参加、存続の必要性を訴えました。支援の難しい人は在宅にも多数いること、施設等の受け入れ可能状況をネットワーク化する必要性が浮き彫りになりました。

暫くすると保護者から「子供が明るくなった」「表情が生き生きしてきた。笑顔が増えた」と異口同音に聞こえてくるようになり、更生園が改善してきたと実感できました。笑顔が増えたのに残念としか言いようがありません。

令和2年8月、県から袖ヶ浦福祉センター廃止の発表がありました。ここまで改善されているのに更生園や移行先のご尽力で移行は肅々と進んでいます。コロナ禍での移行は変化に弱い利用者には厳しいことだと思います。

神奈川のやまゆり園は5年後県立として再開。千葉県は廃止。「民間移行で良かった」と言えるよう今後のサポートや福祉施策を願わずにはいられません。

職員の方々、ご自分の今後を顧みず最後まで奮闘してください。本当にありがとうございます。保護者一同最後まで出来る限りのことを致しますので宜しくお願いします。



更生園より



風光る春、様々な禍で不安な日々が続いていますが、センターの敷地に目を移すと、暖かな陽射しと共に、木々や草花が花咲き乱れる美しい自然に包まれ、一時禍を忘れさせてくれます。

千葉県袖ヶ浦福祉センターは最終年度を迎えることとなりますが、平成25年の事件当時更生園に在籍されていた90名の利用者様も、既に70名が退所され、令和4年4月1日現在、20名まで減少しています。

事件当時、重度・最重度障害のある利用者様の方々は、医療ケアを必要とする身体障害や強度行動障害などにより、すぐに暮らしの場を変えることができず、ここで暮らし続けるしか選択肢がありませんでした。

それは、利用者様、保護者の方にとっては、つらく、歯がゆく、もどかしさを感じる日々だったのではないのでしょうか。

長い期間、検証や検討を重ね、改善に取り組みしましたが、県立施設としての失った信頼を取り戻すことはできませんでした。

千葉県により強度行動障害の方を支援する新たな支援の枠組みが構築され、県立施設廃止の方針が示された一昨年の夏のこと、ここで暮らしという選択は無くなったのです。

千葉県や千葉県知的障害者福祉協会を始めとする多くの法人・事業所の協力で次の暮らしの場の目途が立ち、残る20名の方々もグループホームの開設を待つ等の段階を迎えています。

利用者様、保護者様、職員、それぞれ一人一人が、人生の岐路を迎えることとなります。

一足先にここから踏み出した元職員は、障害の分野だけでなく、行政や高齢、教育など多くが形は変わっても福祉の世界に携わっています。次に歩み出す機会を頂けたこと、大きな決断を下した千葉県、ご支援いただいた県内の知的障害者福祉協会を始めとした関係者の皆様に感謝申し上げます。

新たな暮らしの場へ移られた利用者の方々に「元気に過ごしているよ」と便りが届きます。いつかどこかでお会いできる日を楽しみに、障害のある方が安心して暮らせる日を祈念して止みません。

更生園 施設長 古川 茂

診療室より



新年度が始まりました。福祉センター前の通りの桜も満開で、まさに見頃となっております。

新年のご挨拶で新型コロナウイルスの猛威と、センター内への流入がいつ起こっても不思議ではないことに触れました。やっぱり、やはり、ういに来たか、という印象でしたが、一月末に新型コロナウイルス感染症の感染発生がセンターでもありました。全国的に患者数が激増した時期に当たり、陽性者と判明しても病院へ入院することは困難な状況でした。幸い、利用者の方・職員の方、皆さん軽症で回復することができました。また、センター内での感染拡大も防がれ、更なる新規感染者の発生もなく、二月中旬までに終息させることができました。

昨年度は、診療室も新型コロナウイルスに振り回される一年でした。ワクチン接種に関して、全国的な接種開始当初は、副反応に対する情報が多くありました。強いアレルギー反応であるアナフィラキシーが起きた場合、診療室では対応が限られるため、基本的には病院や大規模接種会場での接種をお願いしていましたが、センターを利用されている方の中には、体調が強く外部機関では接種出来ない方もいるという相談を頂いたため、万一アナフィラキシーショックを起こした場合には、応急処置を行いつつ救急要請・搬送する方針で、診療室でもワクチン接種に対応することになりました。幸い、強い副反応を出した方はおらず、無事三回目の接種を終えることが出来ました。

現在も、感染対策を継続しております。この状況が長期間続くことは皆さんに負担が大きく、コロナ疲れやコロナ慣れも懸念されますが、決めた事項や手順を守り、感染の可能性が疑われた場合には早期に発見できるようにしたいと思います。

さて、今年度での袖ヶ浦福祉センター閉鎖を踏まえ、診療室の各科では、順次他の医療機関へ患者様を紹介しております。受診に関して何かありましたら、遠慮なくご相談下さい。

診療室長 古川 健